
空に金魚

あめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に金魚

【Nコード】

N7958A

【作者名】

あめ

【あらすじ】

夕方の縁日で彼から別れを告げられたとき、思い立って金魚を買う。狭い世界から逃げ出したい。

縁日に行ったときに、金魚を水たまりに落としたことがある。

その日は確か雨上がりの夕方で、じめじめした空気がまだ残っていた。

小学生だった私は母に橙の浴衣を仕付けてもらい、五百円玉と母の手を握って縁日に出掛けた。

神社に着いたら、私は母から離れて真っ先に林檎飴を買いに走った。大きい林檎飴は高いから、小さい二百円の林檎飴を買った。

さて、残りの三百円で何を買おうかと考えていたら、ふいに金魚掬いが目に入った。

同じくらいの歳の子がはしゃぎながら金魚を掬っているのを見て、とても羨ましくなった。

私は他の屋台に目もくれず、林檎飴をしっかりと持ちながら真っ直ぐに金魚掬いに向かった。

金魚は、一匹だけ捕れた。

黒く小さい金魚だった。

一匹だけしか掬えなかったから、金魚掬いのおじさんがおまけに赤い金魚を一匹入れてくれた。

神社の入口にいた母は、私が持っている金魚を見て困った顔をした。うちには水槽がないのよ、と私の頭を撫でながら言った。

池に捨てるしかないわね。

続けてそう言い、神社の中にある池を指差した。

私は何も言わず小さい袋の中で泳ぐ金魚を見た。

狭い範囲を行ったり来たりする金魚は、ひどく窮屈そうだった。

あのとき、母に困惑された自分がとても小さく見え、なんとかして母を喜ばせようと私はない頭を捻った。

そんなとき思い浮かんだのが空だった。
雨上がりで、まだどんよりとした曇り空だったが、所々青空が覗いていた。

狭いから、小さく見えるのだ。

私は駆け出した。

なるべく大きめの水たまりを探し、その中にはしゃしゃと金魚を放った。

三匹の金魚は、空を泳いでいた。

泳いでいたというより、水かさのない水たまりでは跳ねていたというほうが正しい。

しかし当時の私にはそれなりの感動があった。思わず空を見上げてしまったほどだ。

行き交う人々が怪訝な目で私を見ていた。

ばしゃばしゃと、足元で音がする。

浴衣の裾が少しだけ濡れた。

私は三十秒もしないうちに、母にその場から引きずられるように離れさせられた。

今でも金魚を見ると、空に浮かんだ金魚を思い出す。

雄大で、青黒い空に黒と赤の金魚はよく映えていた。

「言いくいんだけどさ、そろそろ終わりにしようかと思うんだ」
彼の口から別れを告げられたとき、なぜか漠然とした悲しみしか受け入れられなかった。

「彼女と、結婚するんだ」

重々しく口を開く彼の姿がやはり愛しいと思う私は、きつとなんの

成長もしていない。

彼と浮気をして三ヶ月半、私はいつでも彼に全てを注いでいたつもりだった。

私は何も言えないまま、俯いていた。

こんなときにふいに金魚の話を思い出したのは、今ちょうど彼と縁日に来ていたからだ。私がここで子供のように駄々をこねて別れを惜しんでも、結果は変わらない。

痛いほどそれが分かるから空しかった。

「最後に 何か買おうか」

屋台の並ぶ神社を一瞥し、彼は人混みの中に入ってしまった。

私も慌てて彼の背中を追う。

背中を追い掛けながらも、私はいつかの金魚掬いに足を向けていた。金魚掬いの前で立ち止まった私を見て、彼は何も言わず金を出した。あの頃と変わらない三百円。

私は赤い金魚を二匹掬うことができた。

今回は、おまけの金魚はもらえなかった。

金魚は狭そうに袋の中を泳ぐ。

私は窒息しそうなくらい苦しくなる。

「ちょっと待ってて」

私は金魚を持ちながら、小走りに近くの自動販売機に行き、二リットルのミネラルウォーターを買った。

彼は理解しかなない様子で私を見た。

そんな彼にお構いなしに、私は空を見上げる。

夕焼けに染まる空が、とても寂しく思えた。

神社の入口でミネラルウォーターの蓋を開け、どばどばと地面に流す。

しかし思うような水たまりはできず、全部コンクリートに染み込んだ。

それでも私は泣きながら金魚を地面に落とす。

「おい」

彼が止めに入ったが遅かった。金魚はコンクリートの上で痛々しく跳ねた。

まるで私だ。

水のないところで必死に跳ねる。

彼がいないところで愛を注ぐ。

なんて狭い世界。

彼が呆けて立っているなか、私は憎たらしくなって金魚を小さく蹴った。

ちっとも映えていない、そう思った。

（後書き）

長かったですね orz ジャンルがわかりません（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7958a/>

空に金魚

2010年12月15日02時30分発行